

第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

父からのパス、フィールドにホイッスルを響かせるために

山形県 東根市立神町中学校 三学年

本間 雄大

私には、サッカーの国際審判になりたいという夢がある。小さいときの最初の記憶にサッカーがあった。父と一緒にやったスポーツがサッカーだったらしい。らしいというのは、私が幼稚園年中のとき、父は亡くなってしまったからだ。正直にいうとその頃の記憶や父の思い出が少ない。母や兄の、「お父さんはこんなときこうする人だったね。」という一言で、記憶の中の父の姿を必死に探す。父が亡くなったとき、兄は中学一年、姉は小学五年、下の姉は小学二年、私は幼稚園の年中だった。母は子育てをしながら一人で生活を支えていくことになった。

私の中には、いつも元気で気丈な母の姿しかない。仕事で疲れていたとしても、自分たち四人のスケジュールを守ってくれた。私がサッカーをこれまで続けられたのも、母に「父の記憶を少しでも長く続くように」との思いがあったからと教えてくれた。

サッカーを続けるということは、お金がかかるということも幼いころから教わった。サッカー用品を購入するときは、必ず私も連れていく。一カ月で履きつぶしたシューズもある。インナーやソックスも数多く必要だった。

母は私だけでなく、兄や姉たちにも学業以外のことを続けさせてくれた。子どもたち四人で話し合い、今一番譲れない必要なもの。今応援できるものを決め、進むことができた。

昼夜働き、休憩時間で私たちに食事を作り、そしてまた働く母に、どうして自分たちのやりたいことが最優先なのかと聞いた。母は、

「お父さんから預かった大切な命。決めたことは後悔しないよう生きなさい。お父さんは何がおきても子どもたちの生活を守りたいと考えてくれていたの。私もそれを応援したい。」

父の愛情に初めてふれた瞬間だった。私の中で、もう遠い父の姿。父が生きていたら何も思わず手に入れていたであろう、サッカー用品。父が亡くなったことでサッカーをやめなくてはいけなかったかもしれない。

しかし、今私は国際審判を目指している。サッカーの審判というのは、四級審判から始め、規定に沿い昇級を目指す。私は今三級審判を受験している。中学生が昇級試験に挑むことは珍しいことだ。

二〇一六年四月現在、日本サッカー審判員総数二十五万四七四一名。三級

第54回中学生作文コンクール

審判になれば都道府県サッカー協会が主催する試合を担当することができ、そして目指す国際審判へ一歩近づいたことになる。

父と蹴ったサッカーボール。今立つ場所や将来に夢を持てることに感謝せずにはいられない。

父が亡くなり、それまでの生活はできなくなっていたかもしれない。しかし、父は家族が生きていけるようにと「もし万が一」を真剣に考えてくれていた。

万が一のために何故保険なのか。貯金は確実性はあるが積み立てることを止めてしまった時点でマックスだ。保険は、何も起きない場合手元に何も残らないかもしれないが、両親は、

「備えるために保険に入るのは当然だが、掛けていくお金は、他の家族の支えの一部になっているのかもしれない。」

という気持ちで保険を掛けていたという。それは深い愛情と大きな人生設計だと中学生になり少し理解ができるようになった。

将来の夢を捨てずに進める自分がいる。フィールドに立つとき、沢山の感謝を忘れずにいきたい。多くの人に夢を与えられる人になりたいと思う。私を支えてくれた方々を想い、世界に通用するために努力をしていきます。

お父さんからの応援のナイスマシスト、必ずつなぎます。

響け!!フィールドにホイッスル!!